2Ja-6　　高齢化に伴う過疎山村の住生活と住文化の変容に関する地域特性研究
（第一報）

○千森　督子*　米村　敦子**（*和歌山信愛女子短大、**宮崎大学）

目的）過疎化・高齢化が著しくすすむ中、山村は厳しい社会状況に取り巻かれ、生活環境においても対策,改善の必要性に迫られている。本研究は、九州山地と紀伊山地の過疎山村を比較検討する中で、広域的視点から過疎山村の住環境と住生活、住文化の現状と変容を捉え、各々の地域特性を把握し、今後の課題を明きらかにするものである。
方法）両地域から過疎化・高齢化がすすむ特徴的な地区を選定し、事例研究を重ねる方法をとる。第一報は紀伊山地から高齢化率が46%と全国第二位の三重県南牟婁郡紀和町の木津呂地区を対象地域として考察する。木津呂地区は空き家率が高く、全28戸の内、居住家屋は15戸である。研究方法として訪問、聞き取り調査法によるアンケート調査と住宅実測調査、住まい方調査の3手法を用いた。調査年月は平成10年11月と11年11月である。
結果）戦後の住生活の変容では、昭和20~30年代の電気、簡易水道、洗濯機の普及による利便性が強く認識され、電は昭和40年頃から使われなくなっている。住様式で特徴的なのは、高齢化に伴い就寝空間にベッドを持ち込む椅子座生活の事例がみられる点である。現在の住まいに対する満足度は高く、困窮点としては、湿気や衛生空間に関する問題等があげられている。神仏祭祀や正月飾りなどの生活文化は継承されているが、住宅や集落の長年培われてきた文化的価値を認識している割合は低く、後継者不足により継承も困難としている。近所付き合いは頻繁になされているが、地域活動への参加は二分している。村や地域への愛着は高く、大半が永住志向をもっているが、集落内の戸数を少ないとし、高齢化による人口減少など将来への不安を指摘し、地域活性化の具体策はないとしている。